



外交極秘解除文書 連載 ⑨

「冷戦後の世界」に臨む日本外交の挑戦

湾岸危機 人質解放をめぐる攻防(上)

— 中曽根イラク訪問の思惑と政府の懸念 —

帝京大学専任講師
山口航

やまぐち わたる 同志社大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士(政治学)。専門は日米関係史、安全保障論。著書に「冷戦終焉期の日米関係 分化する総合安全保障」(近刊)など。

一九九〇年八月、イラクがクウェートに侵攻した。湾岸危機の始まりである。ブッシュ米国大統領とゴルバチョフ・ソ連共産党書記長が冷戦の終結を宣言してから、わずか八カ月後の出来事であった。

さらに世界を驚かせたのが、イラクが自国内の外国人を人質としたことである。この解放を求め、プリマコフ・ソ連大統領特使、ワルトハイム・オーストリア大統領、米国のジェシー・ジャクソン師、ヒース元英首相などが、次々とイラクを訪問し、フセイン大統領と会談した。「人質サラミ」——この時バグダッド外交団の間で流行し

た言葉である。各国要人が訪問し、イラク側に同調する度合いに応じて、小出しに人質が解放されるという現象が起こったのである(片倉邦雄『人質とともに生きて』毎日新聞社、一九九四年)。日本からも、アントニオ猪木参議院議員などが相次いでイラクに渡った。しかし、日本人の人質解放は進まず、政府への批判が高まった。そうしたなか浮上したのが、中曽根康弘元首相のイラク訪問計画である。イラク在住の日本人団体が、事態打開のために中曽根の来訪を求めたのであった(以下、外交史料館所蔵史料202110534などに基づく)。

中曽根には、一九七四年に通産相としてイラクを訪問した経験があった。この時、ラマダン工業相と経済技術協力協定で合意し、革命評議会副議長であったフセインとも交歓している。これを機に中曽根は日・イラク友好議員連盟を設立し、首相に就任するまで会長を務めていた。

イラク側も前向きであった。イラクの民間団体が中曽根をイラクに招待する意向を表明し、フセインとの会談を準備する用意があると発表したのである。イラクのアジズ副首相は、中曽根らが訪問すれば「日本人人質らを解放するかもしれない」と、三宅和助中東調査会理事長に示唆した。また、中曽根自身にもアルリファイ駐日イラク大使から接触があり、中曽根はフセインらの意向を確認したという（中曽根康弘『中曽根康弘が語る戦後日本外交』新潮社、二〇一二年）。

「神が与えたチャンス」

一〇月二六日、イラク訪問の意向を固めた中曽根を、栗山尚一外務事務次官が訪ねた。

中曽根は「今カンカンに怒っている人達は、気分がEASEされ（和らげられ——筆者補足（以下同））よう。放っておけば、外務省に対する怨嗟の声になる。自分が行

けば、面倒を見てくれるということになるう」と語った。それに対して、栗山は「外務省もいろいろやってきている」と弁明した。だが、「そうは外務省がいつても、実行する人達は空回りしている。自分が行けば沈静化しよう。今のままでは外務省はもたないぞ。在留邦人保護は、外務省の大きな使命だ」と中曽根は主張した。

その場で議論されたのが、中曽根の肩書についてであった。中曽根が政府特使としてイラクにおもむけば、日本政府のお墨付きを与えることになる。しかし、米国政府などは、各国の著名人のイラク訪問に批判的であった。対イラン包囲網の足並みを乱すものと映ったからである。実際に、カーター元米国大統領にもイラクから訪問の打診があったが、ブッシュ政権は「概してネガティブ」であり実現しなかった。

だが、時は中曽根に味方した。折しも、リクルート事件への関与が疑われ、中曽根は自民党を離党していた。それゆえ、形式上は、自民党や政府と無関係と言えたのである。中曽根は、「海部の手紙は要らない。党の代表でなくてよい。FREELANCE（無所属）で自由にやればよい。……無所属であるがゆえにできることであり、これは神が与えたチャンスであると思っている」と栗山に語った。

これは日本政府にとっても好都合であり、栗山も「恐縮ながら F R E E L A N C E でお願したい」と依頼した。政府は、国際的な影響を抑えるべく、関与していないとの立場を貫くことになる。

一方で栗山は「政府としては通訳を出したい」と申し出た。実はこの約一カ月前に、金丸信元副総理が訪朝し金日成主席と会談していた。その際、日本側の通訳や外務省職員を入れず、日本政府の見解に反する合意を発表し、問題となったのである。栗山は「向うの通訳のみでは危ないと思う」と釘を刺した。中曽根は、金丸方式は「できないし、やらない」と述べた。かくして、外務省員が通訳をすることなり、会談の記録が残されることになった。

イラク側のいらだち

自民党では、各派閥から副幹事長クラスが集められ、佐藤孝行幹事長代理を団長とする八人のイラク訪問議員団が結成された。そして、自民党が日航特別機をチャーターし、これに中曽根が便乗する形をとった。中曽根は「党の中堅は連れていく。これは、(たまたま)同時に行くということとでよい」と栗山に述べている。

中曽根らのイラク訪問に先立ち、佐藤文生日本アラブ協

会顧問が、イラク大統領府にて、一行のリストを先方に手渡した。このとき、小池百合子同協会事務局長も同席している。佐藤は、小沢一郎幹事長をはじめ「与党たる自民党が全面的にバックアップを行っている旨」をイラク側に説明した。

第一副首相となっていたラマダンは、「ナカソネ(中曽根)元総理一行の当国訪問をかん(歓)迎する」と述べつつ、「しかし右訪問は日・イラクそれぞれの立場がかくも困難になる以前になされるべきであったのに、このような形で旧友と再会するのは残念である」と続けた。そこで「現在日本は湾がん(岸)に派兵してはいないと言うものの、実質的には米国の側に立って戦争をしかけているのと同じ事である」と批判した。対米協調整勢を示す日本政府に、イラク側のいらだちは募っていたのである。

交錯する思惑

それならば、なぜイラク側は中曽根を招いたのか。片倉邦雄駐イラク大使は、その目的は二つあったと分析している。「国際的にこ(孤)立している中であって、湾がん(岸)危機解決に向かって西側主要国との対話が引き続き維持されているとのポーズをとること」と、イラクの立場を説明



1990年11月1日、イラク訪問を前に海部首相(右)を訪れた中曽根元首相(毎日新聞社)

するとともに「平和解決に向けての『取りなし』を期待しうること」である。イラクから見れば、特使ではなくとも、中曽根は著名な現職の国会議員であり、政権与党が「全面的にバックアップ」するミッションとして、重要だったのである。

また、外務省でまとめられた「予想されるイラク側よりの各種アプローチに関する留意点」という文書には、「これまでイラクを訪問した内外の要人の発言中、イラク側立

場に少しでも『理解』を示すようなものは、ことごとく先方プロパガンダに悪用されている」(傍線原文)とある。イラク側にとっては、中曽根訪問も「有用な」発言を引き出しうるチャンスであった。

こうした点に関して、中曽根は「自分はストライク・ゾーンを外さないようにする。しかしすれすれのこともある。そうしないと話し合いにはならない」と栗山に語っている。事の成否は、中曽根の手腕にかかっていた。

では、リスクを取ってまで、中曽根をイラク訪問に駆り立てたものは何だったのか。中曽根は、「本音ベースでは愛知の〔参院〕補選が主たる理由であるが、新法審議において筋論だけでは通せないところがあるのでその一助となれば幸い」と吐露している。この時、日本の人的貢献を可能とする、国連平和協力法が審議されていた。その賛否に関して与野党が拮抗し「いま参院は四議席ぐらいの攻防になっっている」(小沢一郎)状態であった。中曽根は、人質解放を成し遂げて政府や自民党を援護しようとしたのである。ここには、イラク訪問を梃子にリクルート事件の汚名をそそぎ、復権を果たそうとの思いも見え隠れする。

中曽根、外務省、イラク……それぞれの思惑が交錯するなか、一行は羽田から飛び立った。●(次号に続く)